
警告。そして実行

ふく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

警笛。そして実行

【Zコード】

N4071D

【作者名】

ふく

【あらすじ】

「ホームページへのこだわり。物事のこだわり。こだわるのは、いいのですが……。

「コーヒーには少し、こだわりがある。例えば、そう、こんな言葉を聞いた事はないだろうか？

「コーヒーはブラックで」とか、「ミルクや砂糖を入れるのは邪道だ」などだ。

私の場合は少し違う。うまいコーヒーはブラック。まよいコーヒーにはミルクや砂糖をぶち込む。ブラックでは飲まない。なぜなら、それはコーヒーみたいな飲み物だが、コーヒーではないと思つていいからだ。おかしな話だ、というのは解つていいのだが、どうにもこりこりも、まよいコーヒーには我慢ができないのだ。

周りには、背広を着たサラリーマンや家族連れ、大学生であろうか若い四人組などで賑わっている。店内のBGMは子供の楽しげな声と曲名が解らないクラシック。私は、ファミリーレストランにいる。先ほどから、忙しく働いているウェイターが、隣の席で喧しくしゃつべている二人組みに料理を運んできた。彼氏であろうか、椅子に座る男性には、ハンバーグを。対面のソファに座る女性の前に、パスタを置いた。それを横目で確認し、ああ、店員は香りも運んでいるのだな、と唾を飲み込んだ。

「おいおい、いい大人がみつともない」と、タバコの煙を吐き出しながら、前の席に座っている男に言われた。ニヤけているのが気に入らないが、はて、ニヤけているのニヤとはどんな意味なのか、少し気になつた。

この男とは、昔、バイト先で知り合つた。それから、七、八年がたつたであろうか。私の数少ない友人で、たまにこうして、一緒に食事をする。当時は、結構な頻度で遊んでいたのだが、今ではこうして、たまに会うくらいだ。などと、どうでもいい回想をして、「で。今日は、俺に何かよう?」料理が運ばれてくるであろうキッ

チンの方を見ながら言った。「いや。そうだな……飯を食いたかつただけ」こんな関係である。

オーストラリア大陸に似ているハンバーグ。右側のエビフライは、今にも転げ落ちそうな角度で寄り添っている。安定と不安定か？だが、エビフライはこの角度で安定してい……などというばかげた思考は、料理の香りが消してくれた。大陸を分断して口へ運ぶと、おいしかった。そのためか、私と友人は約五分で食べ終わった。その間、会話はない。否、必要ではない。

食後はコーヒーが飲みたくなる。落ち着くのだ。ドリンクバーへ行き、カップを機械に置いて、『ブレンンド』と書かれている横のボタンを押す。けたたましい機械音と共に液体がカップへ流れ落ちてきた。この出かたは、気にいらなかつたが、友人の注文が入っているので、もう一度見なくてはならない。

驚愕。大げさかだが、近い。

「コーヒーを二つ、一つを友人の前へ、もう一つを飲んだ感想だつた。

なぜ。なぜ、こんなにもまずいのか。ファミレスのコーヒー、すべてまずいといつているのではない。この店のコーヒーがまずいのだ。すべてが台無しに感じる。子供のやかましい声も、隣のうるさいカップルも、はなから気に入らなかつた。台無しだ。

ミルクと砂糖を取つてきた。

「おい、ずいぶんと機嫌が悪そだな。どうした？」どうやら、顔にでていたらしい。彼の顔を見ると、一ヤけでいなのが少し気になつたが、

「このコーヒー、まずいと思わない？」と、彼もコーヒーを飲んでいるので聞いてみた。

「俺は、気にならない。そうだな、そこまで気に入らないのなら、他にしろ」

「まあ、そつなんだが……」

ちつ、と舌打ちが聞こえ、「だいたい、お前は、この店に入った時から機嫌が悪かつただろ？ またしかに、混んでいる、そしてるさい。お前が気に入らないってのも解る。だがな、いちいち、いちいち、気に入らない、気に入らないと。まったく、何様のつもりだ？ 俺様か？ お客様か？ うん、お客様は認めよう。だがな……」と、眉をひそめながら冷淡な口調。危険、かもしれない。なので、

「悪かつた。すまない。だが、説教は聞きたくないね」と、無理やり割り込んだ。彼は足を組み、さらに、ちつ、と舌打ち、視線を窓の外へ。そしてタバコに火をつけた。この、彼の一連の動作は、機嫌が悪いときに起るものだ。だから、危険である。

「コーヒーに、ミルクと砂糖が混ざったあと、大人気なかつた、と感じたのでやつと、反省した。

元は、コーヒーだつたが、別の飲み物になつた。彼の警告をふまえ、これを飲む。だが、いや、やはりとくべきか、まずい。気に入らない。

「またか、もういいかげんにしてくれ。俺は帰る」
どうやら、警告が、実行されてしまったようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4071d/>

警告。そして実行

2010年12月9日02時42分発行